様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０１０３８

研究課題名（和文）イラン国立博物館ほか所蔵のパルティア期資料の調査

研究課題名（英文）Research of the Arsacid material at the National Museum of Iran and other places

研究代表者
春田　晴郎（Haruta, Seiro）

東海大学・文化社会学部・教授

研究者番号：９０２６６３５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　新型コロナのため予定していたイラン国立博物館における調査が行なえないなどの障害はあったが、アルシャク朝パルティア時代の碑文付き資料について、既存の遺物写真を3D化し解読に資する作業を国際シンポジウムで発表し現地研究者にも還元してきた。アルタバーン4世浮彫・碑文については、それが既存の碑文（左右両端に現在断片が残る）を潰して彫り直された可能性が高いことを指摘し、ビーソトゥーンのワラガシュ浮彫の碑文についても新たな読みの可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　既存の写真も使用しながらそれを3D化し、碑文の解読に役立てようという試みを、約2千前のイラン、アルシャク朝パルティア時代の資料を対象に行なった。王朝最末期の碑文付き浮彫については、それが既存の碑文（断片が両端部に残る）を潰して彫り直された可能性が高いことを示した。また、他の王名入り碑文についてもこのような方法で新たな読みを探れることを示した。さらに、新出の碑文付き浮彫でも、碑文が新たに彫り直された可能性が高いことを述べている。

研究成果の概要（英文）：Although there were obstacles such as the inability to conduct the planned research at the National Museum of Iran due to the Corona, the work to contribute to deciphering the inscriptions from Arsacid Parthian times by making their 3D models from old photographs was presented at the international symposiums in which Iranian scholars participated. It is pointed out that the Artabanus IV relief and inscription was highly likely re-engraved over the existing inscription, whose fragments remain on the left and right edges of the present relief, and that this method also enable us to reach some new readings of the inscription of Vologases relief at Bisotun.

研究分野：古代イラン史

キーワード：パルティア　古代イラン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

イラン国立博物館等に所蔵されている、あるいは現地に残る、アルシャク朝（アルサケス朝）パルティア時代の浮彫資料や小型造形資料に対する研究を進めていく際に、大規模な機器を持ち込んで調査することは様々な理由で難しい。そのため、これらの対象に対して、レガシーな写真資料を用い、新しいが比較的安価な技術であるフォトグラメトリ・ソフトウェアを用いて新たな知見を得ることができないか、という観点から本研究を企図するに至った。ただし、実際には新型コロナ感染症のために現地調査を行なうこともできなくなり、次に述べるように研究の方向性を一部変更せざるをえなくなっている。

２．研究の目的

(1)　イラン国立博物館等に所蔵されている、あるいは現地に残る、アルシャク朝時代の浮彫資料や小型造形資料に対して、写真撮影を中心とする作業を行ない、それを元に遺物の 3D モデルを作成すること

(2)　それらを用いて、とくに複数の時期に刻まれた浮彫・碑文については、先後関係に注意しながら、作風を美術史の観点から比較し変化を明らかにすること、また、アラム系文字碑文については後彫りによって削られてしまった部分を考慮しながら残存部分の解読を行なうこと

(3)　このような作業を行なうことで､決定的に資料の不足しているアルシャク朝最末期の状況、とくにスーサを中心とした地方の支配者と皇帝との関係、を明らかにすること

以上が当初の研究の目的であった。このうち(1)については新型コロナ感染症のためにほとんど実施できなくなることが 2 年目（2020 年度）初めには予期できたため、使用する資料は従来までに撮影していた写真資料を中心とすることになった。

３．研究の方法

(1)　当初の予定では 3 年間の期間のうちの初年度に、国立博物館等と研究上必要な手続きを済ませた後、2 年次に関連資料の写真撮影を行ない、それを元に 3D モデルを作成し、それを元に上記目的に書いたような成果を目指して研究を行なう予定であった。

(2)　しかし､3 年間の期間のうち初年度(2019 年度)9 月と 12 月にごく短期間イランに出張し、一部新たに写真撮影も行なうことはできたが､MOU を締結するには至らず､2020 年度 2-3 月の研究出張が新型コロナ感染症のため不可能になった、その後 2 年次（2020 年度)、3 年次（2021 年度）も海外出張が行なえず、現地での撮影等による新たな資料取得は断念せざるを得なかった。

(3)　とはいえ、本研究は、もともとレガシーな写真資料を用いることを主眼としており、とくに対象資料の中でも最重点においていたイラン国立博物館所蔵スーサ出土アルシャク朝最末期アルタバーン 4 世浮彫については、すでにかなりの数の写真の蓄積があった。また、国立博物館との研究上の協定（MOU）を結ぶことはできなかったが、それらを用いた本研究の成果を少なくとも口頭発表で用いることについての許可は得ることができたので、アルタバーン浮彫についてその立体構成を明らかにすることや、それを通じて不明点の多かったアルシャク朝最末期の地方支配のあり方について明らかにすることはある程度可能になった。

４．研究成果

１年次末（2020 年 1 月）以降、現地調査に赴くことができなくなり、また事務的な折衝も十分に行なえず一部計画の変更を余儀なくされたが、そもそもがレガシーな写真資料の活用を目指したものでもあり、大きな支障にはなっていない。本科研の研究成果は以下の通りである。

(1)　研究の主要な対象であるレガシーな写真資料を用いて 3D 画像を作成しそれを碑文研究に役立てる、という点では、以下の 2 資料について成果を得た。雑誌論文への発表には研究期間中には至っていないが､国際シンポジウムでの発表を行ない､イラン側研究者へのフィードバックもなされている。

①　イラン国立博物館所蔵スーサ出土アルシャク朝最末期アルタバーン 4 世碑文付浮彫については、2022 年 2 月の国際シンポジウム発表“Erasing the Past: Re-engraved Bas-reliefs and Inscriptions during the Parthian Period”において、次のようなことを明らかにした。未解読の左辺右辺のアラム文字碑文は元々存在した大きな碑文の一部であり、それを消してアルシャク朝パルティア最末期に現存の王と総督の浮彫およびそれに付随する上部と中央部のパルティア語碑文が刻まれた。未解読の右辺碑文は、psq「刻する」などの語が読み取れる。ただし、文字はエリュマイス字体ではなく、パルティア文字に近い。

② ビーソトゥーンのワラガシュ（ウォロガセス）浮彫に付随する碑文については、2020 年 11 月の国際シンポジウム発表“An Attempt to Decipher the Parthian Inscription on the Vologases' relief at Bisotun, Iran: With the Help of Retrospective Photogrammetry”において、浅く彫られ風化も進んでいる２千年近く前の碑文に Retrospective Photogrammetry を用いる際の限界を指摘し、にもかかわらず従来の読みに替わる解読も部分的には可能であることを示した。

(2) 3D 画像を用いたわけではないが、アルシャク朝期浮彫碑文研究についてはさらに、Yusef Moradi 氏の発掘したジャヴァーンルード出土浮彫に付随する碑文の解読に協力している。その成果は 2019 年に *Parthica*, 19, 143-158, Yusef Moradi, “Epigraphical and iconographical analysis of a Parthian bas-relief from Javanroud, Western Iran”にて発表されている。ここでは、いったん書かれた神（あるいは英雄）の名が消されて別のアラム文字銘文（「悪魔」および「サルウ（悪魔名）」）が新たに刻まれた可能性が高いことを指摘した。上述のアルタバーン浮彫の場合は碑文を消して新たに浮彫＋碑文を彫り直したものであるが、こちらは碑文のみを書き換えている例と考えられる。いずれにしてもアルシャク朝期イラン西部西南部の碑文については書き換えの可能性を考慮に入れなければならないものが複数あることが示される。この彫り直し・書き換えについては 2022 年の上掲国際発表“Erasing the Past: Re-engraved Bas-reliefs and Inscriptions during the Parthian Period”においても確認した。

(3) その他、アルシャク朝期のパルティア語碑文、エリュマイス文字アラム語碑文については、以下のような学会発表を行なっている。2019 年 7 月「サバーハ・コレクション銀器のエリュマイス銘文：パレオグラフィーと年代」、同 9 月（国際学会）“Neo-Elamite, Middle Iranian and related inscriptions on metalware kept in Japan”。前者は新出のエリュマイス文字資料が後 2 世紀中葉以降のアルシャク朝とエリュマイス王国との関係を考察する上できわめて重要であり、本研究の主対象であるアルタバーン浮彫がなぜエリュマイス文字アラム語でなくパルティア語で記されているか等、従来不明であった問題を解決するものであることを示した。後者は、国際的にあまり知られていない在日本の資料紹介であるが、とくに東京国立博物館所蔵「こぶ牛の銀皿」（ペルシアの地方王朝の碑文付き）について、唐草文様の比較をハハーマニシュ朝（アカイメネス朝）ペルシア銀器のそれと行なう等、新しい知見も示している。

(4) 新型コロナの影響で当初予定していた海外における調査は行なえなかったが、その代わりに東海大学文明研究所が所有する鈴木コレクション中のイラン、イラク、湾岸諸国のスライドをデジタル化し、フィールドノートとともに研究した。イランのスライドについては 1968 年に撮影された貴重なものであることも確定できた。概要を 2022 年 3 月に「東海大学文明研究所所蔵鈴木八司コレクション中のイラン・イラク等に関するスライド紹介」というタイトルで発表した。

(5) その他の成果として、以下が挙げられる：
① アルシャク朝期エリュマイス王国の碑文付浮彫が複数存在するイーゼ盆地の重要性を論じた論文“Historical Importance of Īzeh: Viewed from Later Periods”を 2020 年に刊行した。
(5b) 2021 年 1 月に「パルティア・サーサーン朝期イランおよび周辺地域の建築」というタイトルで発表を行ない、その中で本研究課題の背景となるパルティア期の都市のあり方についても考察した。
② 2021 年 12 月に、論文「西アジアの古代都市」を発表し、その中でパルティア語史料なども駆使しながらこの時期のイラン都市とその社会のあり方・特徴を考察した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Yousef Moradi and Seiro Haruta | ４．巻<br>21 |
| ２．論文標題<br>Epigraphical and iconographical analysis of a Parthian bas-relief from Javanroud, Western Iran | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>Parthica | ６．最初と最後の頁<br>143-158 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.19272/201903501010 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>該当する |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>Seiro Haruta | ４．巻<br>2 |
| ２．論文標題<br>Historical Importance of Izeh: Viewed from Later Periods | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>Ancient Text Sources in the National Museum of Iran | ６．最初と最後の頁<br>27-34 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>春田 晴郎 | ４．巻<br>3 |
| ２．論文標題<br>西アジアの古代都市 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>岩波講座 世界歴史 | ６．最初と最後の頁<br>163-184 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　3件／うち国際学会　3件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>Seiro Haruta |
| ２．発表標題<br>An Attempt to Decipher the Parthian Inscription on the Vologases' relief at Bisotun, Iran: With the Help of Retrospective Photogrammetry |
| ３．学会等名<br>Online International Conference for the Iranian Archaeological Webinar, 2020（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>春田 晴郎 |
| ２．発表標題<br>パルティア・サーサーン朝期イランおよび周辺地域の建築 |
| ３．学会等名<br>第2回中東・オリエント建築研究会（招待講演） |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Seiro Haruta |
| ２．発表標題<br>Neo-Elamite, Middle Iranian and related inscriptions on metalware kept in Japan |
| ３．学会等名<br>9th European Conference of Iranian Studies（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>春田 晴郎 |
| ２．発表標題<br>サバーハ・コレクション銀器のエリュマイス銘文：パレオグラフィーと年代 |
| ３．学会等名<br>第26回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Seiro Haruta |
| ２．発表標題<br>Erasing the Past: Re-engraved Bas-reliefs and Inscriptions during the Parthian Period |
| ３．学会等名<br>Online International Conference for the Iranian Archaeological Webinar, 2022（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>春田 晴郎 |
| ２．発表標題<br>東海大学文明研究所所蔵鈴木八司コレクション中のイラン・イラク等に関するスライド紹介 |
| ３．学会等名<br>第27回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|